
accidental overlapping ~ 偶然の重なり ~

あーずにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

accidental overlapping ～偶然の重なり～

【Nコード】

N0804Y

【作者名】

あーずにゃん

【あらすじ】

俺は、偶然、というか殆ど奇跡で超難関高校に入学し、偶然校門前で出会った奴を助け、そいつが偶然同じクラスで隣の席。あげくの果てには、携帯の機種まで同じだった。そんな偶然が重なり、いろいろな人や物、運命までも巻き込みながら、偶然にも今、俺と藤和は、同じ場所に立って生きている。

完全オリジナルです！

見ていただけるとうれしいです。

オリジナルを書くのは始めてなので、感想、アドバイスなどお願いします m () () m

第一話 『奇跡と出会い』

入試で奇跡が起これると思うか？

普通は絶対に起きない、ってか、起きたらヤバいを通り越して笑えるよな。

でも、起こってしまったのだ。

三年前、東京、愛知、大阪の三県で、試験的に導入した入試の方法があった。

『マークシート受験法』ってヤツだ。

それを採用した理由は、出来るだけ多くの問題を短時間で出し、それをどれだけできるかっていう内容だ。

なぜそんなことになったかというと、同じく三年前に創立された、

『国際選抜職業実践型高等学校』通称国選高、だ。

その学校は、全世界の中でも初めての試みで、実に先進的なものであった。

普通の高校は、仕事に就くために勉強する。

が、この学校は実際に仕事を実践し、その職についてのプロより上の存在になること（野球で言えば、メジャーリーガーだ）これを目指している。

三年前、できた当初は『国際職業実践型高等学校』という名称で、倍率は40倍をオーバーした。

そのせいで、採点の時間がかかり、他の高校への受験者の激減が起こった。

そのために打ち出したことが、『受験者を点数の高い順からドラフトすること』だった。

ちなみに定員は80名だ。

話を戻そう、それで、俺に奇跡が起きたってのは、この超エリート高校に選ばれたことだ。

ちなみに、俺はある一教科以外は全て平均点から-20だ。

そんな俺が受かった訳は、マークシート受験法なるヤツのせい。

4択の問題を、わからずに適当に書いたら、正答率が95%を超えた。

俺の勘も捨てたもんじゃないらしい。

まあ、いいことなんだろうが、俺は少し迷惑している。

二ユースが始まれば、堂々と合格した80名の名前が出る。(人権侵害とかいうやつにあたらないのか?)

学校へ行けば、校門にでっかい横断幕がある。

クラスに入れば、女子からの質問攻め+男子の冷たい目。

なんかどこぞのスター様の気分だ。

決してちやほやされるのが嫌なわけではない。

目立つのが嫌なんだ。

俺は普通の人生を普通に生きて行きたかったのに…。

かと言って、この卒業したらエリート確定の高校に受かり、それを破棄することは世間的に無理だ。

だから、俺はこの高校に進学した。

申し遅れた、俺の名前は立川昂
たちかわすばる

。国語の成績以外全て悪く、顔は中の上、スポーツもまあまあできる。身長も178cmとまあまあ高い。

まあ、こんなところだ。

特に特徴などない、ちょっと背の高い普通の一男子高校生と違ってくれればいい。

ただ、特徴があるとすれば…女子が苦手ってことかな。ていうか、元々人と話すのが苦手だ。

だから、目立たないで、いつかは気の合う人とであって、子供作って、ひっそりと暮らしていきかけた。

…だが、それも無理そうだ。

今、俺の目の前には、無数の記者たちがかシマウマに群がるハイエナよろしく、150cmの小柄なポニーテール娘に群がる。

マイクやICレコーダーを様々な場所から押し付けられて、苦しそうにしているそいつを、なにを思ったのか俺は、人間が苦手な上に、そいつが女子だったのに、助けようとしたのだ。

「よう、お前もこの学校だったのか、行こうぜ。」

記者の間を割って入り、ポニテ娘の手を引いた。

最初はわけが分からないような顔をしていたが、俺の意図を理解したらしく、話を合わせ、記者の群れから抜け出した。

「別に…助けてくれなくても良かったのに。」

「迷惑だったか？」

「そういうわけじゃないけど…。」

こいつ、体は小さいくせに、余計な意地をはるらしい。

「なら、いいだろ。」

やっぱ人と話すってのは疲れるな。

特に異性なら二倍疲れる。

ポニテ娘が、何か思いついたように顔を上げた。

「あんたって、どっかの社長の子供だったりするの？」

「そんなわけない。どこにでもある家庭の長男だよ。」

「ってことは、あんたって立川…・昂？」

「な、なんで知ってるんだ？」

この学校に入学するってことと、さっき社長の子供とか聞いてきたから、国家機密のデータベースにでも入り込むことができる家柄な

のか？

「なんでって、ツイッターとかフェイスブックよ。あんたとあたし結構騒がれてるわよ。」

「な、なぜだ？」

「一般家庭から受かったからよ。この学校の生徒なんか、授業料のたっかい塾とか、家庭教師とかに毎週40時間くらい勉強教えられてる、金のある社長とかそこら辺の子供ばっかよ。」

「そうなんか・・・。ってことは、あんたも一般家庭なのか？」

「そうよ。父親が中小企業の課長やってる、ありきたりな家よ。ていうか、あんたってよばれるとム力つくわね。」

お前も俺のことあんたって呼んだじゃねえか。

「じゃあ、なんて呼べばいいんだ？」

藤和亜美

とうわあみ

。

「藤和な。分かった。」

「それでいいわ。早くいかないと遅刻するわよ。」
携帯のディスプレイを俺に見せる。

「そうだな。」

そういつて横を向いたときには、藤和はもういない。

「早くこないとおいてくわよー！」

ったく、入学早々変な奴に会っちゃまったもんだ。

どうせめがねをかけたやつばっかなんだろ、と思ったが、そういう奴は5割くらいで、机に突っ伏してる奴が2割、鏡をみてせっせと髪をなおしてる奴が2割、残りの1割は普通に話しているだけだった。

(俺の席はどこかな、と。)

俺の席はなんと窓際の一番後ろ、なにをするにしても最高のポジションだ。

ほんわかした気持ちでスクールバックを机におく。

「あら、あんた隣なの？」

「え、ああ。そうみたいだ。」

「ふーん。隣で変なことしないでよ。」

さつき会ったばっかなのに俺のなにが分かる。

「あ、そういえば、メアドと番号教えてよ。あたしこういう奴ら苦手なんだ。」

前のめがねをかけた真面目ちゃんたちをみて、うえー、と舌を出してみせる。

「分かった。はい。」

僕は携帯を出して、藤和の方へ向ける。

「なに、くれるの？」

「赤外線だよ！」

ああ、そう。と言って、藤和も携帯を差し出す。

「ああ。」

二人の声がそろろう。

同じ機種だったのだ。

偶然にも。

「ま、まあ、これ結構人気モデルだし、かぶることもあるわよね。」

「あ、ああ。それより早くしないと先生くるぞ。」

ピロリン と赤外線を終えた合図が聞こえた。

顔を上げると、長いまつげに少々切れ目の気の強そうな目。

整った鼻に桜の花びらのように鮮やかなうすいピンクの唇。

さつきは気づかなかったが、こいつは相当美少女だ。

「・・・なにみてんのよ。」

「い、いや、何でもない。」

声をかけられハッと我に返る。

「そんなぼーっとしてると、教師に目つけられて宿題増えるわよ。」

「あ、ああ。」
きつい言葉をかけながらも、少し心配してくれるのは「いつの優しさだろうか。」
少しすると、教師が入ってきた。
どこにでもいそうな奴だったが、言うことがなんか難しい。
国語力があつてよかつたぜ……。

「ちよつといいですか？」

「え、あ、はあ。」

「私、吾妻誠一

あがつませいいち

と申します。」

「吾妻くんね。よろしく。」

吾妻つて、たしか日本で普及率NO.1のウイルス対策ソフトの会社の代表取締役の名字じゃなかったか？

「それで、あなたは立川昴さんですよね？」

「ああ、そうだよ。ていうか、敬語じゃなくていいよ。堅苦しいし。」

「はあ、そうですか。」

「うん。それで俺になんか用かな？」

「あ、すっかり忘れてた。こっちから話しかけたのにごめんね。」

この学校は天然が多いのだろうか？

藤和も天然ぽかったし。

「それで、あの、よかつたら、僕と友達になつてほしいんだけど……。」

「あ、いいよ。とりあえずメアド交換しようか。」

俺がそういうと、吾妻はほっとしたような顔をした。

「吾妻つて聞いただけで分かつたでしょ？」

「ああ、あのウイルス対策ソフトの。」

「うん。この学校に来る前は、なるべく普通の生活がしたくて、公立高校に通ってたんだ。でも、お父さんが有名だから、みんなに一目おかれて、まわりに誰もいなかったから……。」

「そうなんだ。大変だったね……。」

「どうやら、金持ちも金持ちで大変らしい。」

「あ、それじゃ、また後で！」

「あ、おう。」

あいつとは話しても疲れなかったな。

気が合う奴なのかもしれない。

そして、一限の授業が始まったとき、俺はそのカリキュラムに絶句した。

第一話 『奇跡と出会い』（後書き）

感想いただけるとうれしいです。

第二話 『衝撃の寮生活』

「な、なんだよ、これ…」

このカリキュラムはどうやら極端に普通の高校で行う授業が少ない。

殆ど『実践』と書いてある。

みんなあんぐりと口を開ける中、教壇の教師が口を開いた。

「入学前にはお知らせしませんでした。この高校では、定期テストは行いません。」

…は？

多分この瞬間、名前も知らないクラスのみんなの心が、一つになったことだろう。

「その代わり、年に4回行う実践型のテストをします。」

その言葉と同時に配られたのは、普通の高校にありそうな学科が書かれた紙だった。

「皆さんには、この中からどれでもいいので、一つ選んでもらい、それに関するテストをします。」

隣の席から椅子が動く音がした。

「あ、あの！という形式で行うのでしょうか。」

俺の隣のやつとは、気が強くて多分このクラスで一番かわいい、長めのポニーテールの女子だ。

「藤和さん…でした。それは、実際の企業に行き、その従業員の方と同じことをしてもらいます。そこで、我々教師がどれほどきているか、判断し、できていなかったと判断した場合は、補修となります。ちなみに、3回失敗したら、退学です。」

おいおい、そんな怖いことをサラッと言うなよ。

「でも、心配する必要はありません。この学校には専門の資格を持った教師がいます。ちなみに私は調理専門です。」

そういうと教師はポケットから、調理師一級の免許をとりだした。

そのほかにも、製菓系など、いろいろとあった。

「それと、入学式はありません。その代わり、寮の準備をしてください。」

入学式もないってサラッと叫びやがった。

この高校は何かおかしい、と思うのは俺だけだろうか？

「寮は、世田谷にあります。」

えーと、ここが渋谷だから…そんな遠くないな。

「通うときは、支給される車を使ってください。」

…は？

免許は？

と思ったが、みんなさほど驚いていない。

「おい、藤和。免許はどうなるんだ？」

「本当にあんた何も知らないのね。この学校、最初の二ヶ月は普通自動車、大型バイク、クルーザーの免許取らされるのよ。」

「く、クルーザーまで…。」

「どんな仕事でもできるようにだつてさ。でも、クルーザーは殆ど使わないって。あと、2年になったら小型飛行機の免許もともらしいよ。」

やっぱりこの学校はおかしい。

「それと、寮は男女混合、三人で暮らしてもらいます。」

おい、何ていった？

年頃の男女を、同じ部屋に置くつもりか？

さすがにこれには、クラス全体にざわめきが起こった。

「それでは、説明は以上です。寮の部屋割りは決まっていますので、今から配る部屋に行ってください。」

そういつて教師は1人ずつ、紙を配り始めた。

俺は812号室らしい。

そして、下にある8ケタの番号は、オートロックだろう。

「あ、言い忘れましたが、明日は学校がありません。家具などをルームメイトと買いに行ってください。それでは、さようなら。」

……
クラスにしばしの沈黙が現れる。

沈黙を破ったのは、吾妻が席を立つ音。

「た、立川くん、行こう？」

「あ、ああ、そうだな。」

「あたしも行くわよ。いいわよね。」

寮に向かう電車の中は、すごく気まずい。

幸い中途半端な時間なので、座席はかなり空いていた。

「あ、あのさ。あたし、藤和亜美。あ、あなたは？」

こいつ、俺のときはあんたって言ったのに……。

話かけられた瞬間、針で突かれたように跳ね上がる。

「あ、ぼ、僕は、吾妻誠一。よ、よろしくね？」

「う、うん、よろしく。」

始めて付き合った中学年のカップルのように、ぎこちない。

横目で笑っていると、後ろから蹴りが飛んでくる。

「吾妻君は、あんたと違って品があるから緊張したのよ！」

そういつて藤和は少し着崩したブレザーと、アイロンとワックスで
整えた髪を順々に指差す。

「これでもゆるいほうだぞ？目黒の学校前行ってみるよ。」

「ば、ばかにしないでよね！そんなん知ってるし。」

どうやら知らなかったらしい。こいつの中学は相当平和だったのか？

「でも、お前だって……」

藤和の胸元のネクタイを見下ろす。

「え?!べ、別に黒でもいいじゃない……」

飛び上がるように座席から立つ。

黒って、なんだ？

「なに勘違いしてるかしらんが、俺はそのゆるんだネクタイのことを
言ったんだが。」

俺がそういうと、藤和はかあーつと顔を赤くし、ゆるんだネクタイを直し、これでいいでしょ、と言う顔をする。

「てか、黒ってお前、ブラ…うっ！」

ブ、と言い始めたときから、藤和の右腕は俺の腹をロックオン。いい終わる前に俺の腹をえぐった。

「そうゆうのは、分かっても言わないもんなの！ほんとデリカシイないわね。だからもてないのよ。」

会ってから半日でもてないって分かるのか。

大した直感力だな。

ていうか、正直いうと、もてたくはないからな。

女子は苦手だ。

「うるせえな。」

「女子だからって甘く見てると、痛い目にあうわよ？」

藤和は右腕を振り回す。

また殴られたらたまったもんじゃない。

「悪い悪い。冗談だ。許してくれ。」

「わかればいいのよ。わかればね。」

そいつって椅子に座って勝ち誇ったような顔で、俺を横目で睨む。

「ねえ。」

「ん、どうした？」

吾妻が俺の肩をたたいた。

「藤和さんとは、前から知り合い？」

「いいや、今日あつたばっか。」

「へえー！すごいね…。あんなに仲良くしてるから、知り合いかと思っただよ。」

勝手に馴れ馴れしくされてるだけなんだが。

「僕は…女の人と話すの苦手です。」

「ああ、俺もそうだぞ。女子は苦手だ。」

「え！じゃあなんで藤和さんとあんなに仲良くできるの？」

「それは、あいつが…」

あいつが、なんだ？

特に理由もないのに助けて、流れてメアド交換して、今は一緒に寮に行く電車乗って。

自然に友達みたいになってたな。

吾妻が俺のことを不思議そうな目で見ている。

「まあ、今度話すよ。」

「えー、今教えてよ！」

「あんたたちうるっさい！ 電車の中くらい静かにしなさい！」

「はい…。」

まあ、結果的に一番うるさかったのは藤和の声なんだが…。

電車を降り、 駅から徒歩5分。

世田谷の住宅街でもかなり目立つ、15〜20階だてだつてのにデザインナーズマンションっぽい。

中にはいると、2cmはあるだろう、厚い防犯ガラス。オートロックの8ケタのキーを正確に打ち込み、エントランスに入る。ブラウンで統一された自販機が6台くらい置いてある40m×50mくらいの、広い空間。

「これは…もう寮っていうレベルじゃないよな？」

隣で豆鉄砲を食らった鳩のような顔をしている藤和を見下ろす。

「そう、ね。これで寮費込みで月10万なんだから、大したもんね。」

「まあ、一応国家プロジェクトだしね。」

吾妻はさほど驚いてはいないようだ。

「そ、そうだな。とりあえず部屋行こうか。」

エントランスの向かって右側にあるエレベーターに乗り込む。

「あ、僕4階だから、降りるよ。じゃあね！」

「おう。」

エレベーターは無音で上がって行く。

「なあ、お前何階？」

「お前って言わないで。」
めんどくさいやつだ。

「…藤和は何階だ？」

「8階よ。ていうか、8階のボタン押してるんだから気づくでしょ。」

「…ああ。それもそうだな。」

でも、こいつは8階のボタンなど押していない。
押したのは俺だ。

それに気づいたらしい藤和は…

「あんたも、8階ね。」

「ああ。」

まさか、とは思うが、こいつと部屋が一緒じゃなかるうな？
二人で、8階に降り、ホテルのようなきれいな廊下を歩く。

801、802と、どんどんと部屋を通りすぎていく。

そして藤和は、810の前で止まり、俺のほうへ振り向いた。

「まさか…」

「お前…」

「「同じ部屋?!」」

おいおい、まじかよ。

一応確認しよう。

「俺は、812だ」

「あ、あたしもよ」

偶然にもほどがある…。

第二話 『衝撃の寮生活』 (後書き)

次回は一週間以内に更新したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0804y/>

accidental overlapping ~ 偶然の重なり ~

2011年11月16日10時41分発行